

クローズアップ

NGO・NPO

アジア・アフリカと共に歩む会 (TAAA)

～現地と共にゆっくり歩んできた18年～

設立の経緯

「アジア・アフリカと共に歩む会」(TAAA)は、南アフリカ共和国の教育を支援するNGOです。アパルトヘイト体制時代の南アフリカでは、大多数の国民には教育を受ける機会がなく、特に黒人居住区やホームランドでは、教育は荒廃し見捨てられた状態でした。

アパルトヘイトが終焉へ向かう一九九二年、南アフリカの貧しい村からコミュニティリーダーの女性が来日し、講演を行いました。参加したTAAA野田千香子代表は、この女性リーダーの力強さに感銘し、また彼女からの強い要請を受けて、日本国内で英語の本を集めて現地へ送り始めました。一九九二年四月に、二、三名の仲間と「アジア・アフリカと共に歩む会(TAAA)」を設立し、本格的な教育支援活動を始めました。

会の歩み

南アフリカでは、アパルトヘイトは撤退し新政権が発足しましたが、荒廃した教育の立て直しは気の遠くなる仕事でした。

TAAAは、国内のインターナショナルスクール等の学校法人や個人に協力を呼びかけ、英語の本を集め、それらを定期的に現地に送る作業を続けていきました。困窮地域で草の根教育支援をしている現地のNGOとパートナーシップを組み、彼らを通

して、学校に本を配布していきました。

また、定期的に現地を訪問し、現地の教育事情やニーズを学んでいきました。ほとんどの支援対象校には、図書室はなく、本棚があったとしてもがらんとしていました。教科書も生徒一人ひとりに行き渡らない学校も多く、現地訪問をするたびに、劣悪な教育環境、特に深刻な本不足を目の当たりにしました。「新しい国づくりの中であって、教育は最優先されるべきなのに、学校にはいまだに本がない。」とNGO職員や教師たちが嘆いていました。

「児童数と比べると本は圧倒的に足りません。移動図書館車があれば、TAAAから送られてきた本を有効に活用できる」という現地NGOの要望に応えて、一九九六年からは、日本で廃車になった移動図書館車を再整備し現地に送るようになりました。

TAAAは二〇一〇年四月で一八年目になります。これまでに約三六万冊の英語の本と二八台の移動図書館車を送ることができました。

活動内容

図書活動推進

現在、南アフリカの九つの地域で、NGOおよび州政府が、TAAAが寄贈した移



↑マンドシ小学校の授業風景

アジア・アフリカと共に歩む会 (TAAA)

埼玉県さいたま市中央区大戸 5-17-1 TEL 048-832-8271

代表：野田千香子 E-mail：cnoda@email.plala.or.jp URL：http://www.taaa.jp/



↑ンドウエドウェ移動図書館プロジェクト

動図書館車プロジェクトを運行し、定期的に対象校を巡回し本や教材を貸し出しています。私たちは、毎年現地から提出してもら

らう移動図書館車プロジェクト報告書に基づいて、進捗状況、問題点、ニーズを把握し、日本側から支援できること、例えば、本の寄贈、車両状況のアドバイス、資金援助などを検討し実行することで、現地でのプロジェクト運行をバックアップしていきます。現地からの報告書から、移動図書館車プロジェクトは地域に根付き、生徒たちの読解力が着実に向上し、読書文化が育っていることを認識しています。

二〇〇九年四月からは、南アフリカ在住のTAAAスタッフを中心に、国際ボランティア貯金の支援金で図書活動支援プロジェクトを行っています。クワズールーナタール州の貧困地域ンドウエドウェで、小学校三〇校を巡回している移動図書館車は、子供たちにとって人気者になっています。バスの周りは、大きな目をクルクルさせながら絵本のページをめくる子など本を読む喜びを知った子供たちで溢れかえります。今後とも、本の送付をはじめ様々な形で、TAAA直轄のンドウエドウェでのプロジェクトを中心に、南アフリカ各地で運行している移動図書館車活動を支援していきます。

学校菜園

二〇〇一年より現地にTAAAスタッフが常駐するようになってから、現地のニーズや可能性がよ



↑マンザンシヨベ菜園活動

く分り、効果的な支援ができるようになりました。スタッフがンドウエドウェ地域の学校に何度も足を運び、教師や生徒、住民とかわる中で見えてきたことの中に、「農業の可能性」と「学校給食の栄養不足」があります。農業に適した土地柄であるにもかかわらず様々な要因で地域農業が未発達であることと、支援対象校の学校給食がトウモロコシの粉を練ったもののみで栄養的にも粗末であるという状況をふまえ、二〇〇七年四月から二〇〇九年三月まで、国際協力機構(JICA)の草の根技術協力事業として、同地域で学校菜園プロジェクトを行いました。

採れた野菜を利用して学校給食を充実させること、子供たちが菜園作りの体験を通して菜園の知識や技術を取得し活用していくこと、さらに親たちを通して、菜園活動が子供たちの家庭に広がり「コミュニティーへの農業促進へと発展することを目的として行ったこのプロジェクトは、全体的に大きな成功を収めることができました。特に「コミュニティーへの普及は予想していた以上に、改めて、学校が「コミュニティーの中心

的役割を果たしていることを認識しました。今後、ンドウエドウェの学校菜園をフォローしていくと同時に、ほかの地域へも積極的に学校菜園プロジェクトを拡大していくことを計画しています。

活動方針

活動は無理なく気長に

TAAAの国内スタッフは、みな無給のボランティアです。各自が無理のない範囲で活動しています。TAAAは教育支援に特化して活動をしてきましたが、本来、教育支援の成果は、すぐに数値や形で現れるものではありません。今後とも無理をせず、ゆっくり気長に現地と共に歩んでいきたいと思っています。

相手を尊重し真の自立へ導く

支援の最終ゴールは、対象者の自立です。アパルトヘイト時代に技術、能力、経済面での自立を妨げられ、精神的にも自尊心を傷つけられてきた南アフリカの黒人社会においては、技術・精神両面でのエンパワメントが必要です。短期的成果達成のために、効率主義に走り、一方的な指示をだしていたのでは、現地の自立にはつながりません。TAAAは、長期的視野で、相手を尊重しながら、自発的な活動を促すことで、自立へと導くことを目指しています。理解と尊敬の念を活動の根底に置くことが、相手をエンパワーし、真の自立へと導くのだと思います。

クローズアップ

NGO・NPO

むすびめの会

(図書館と在住外国人をむすぶ会)

図書館の「多文化サービス」の進展をめざして

設立の経緯

むすびめの会は、在住外国人をはじめとする多様な文化的な背景を持つ人々への図書館サービス(図書館の多文化サービス)について学び、行動するために、一九九一年七月に設立されました。それは、八〇年代の後半から街角でもよく見かけるようになった外国人が、図書館の利用者としても増えてきたことで、彼らへのサービスについて学びあう中から生まれました。当時は、ニューカマーの外国人労働者に対しての入管法の改正(一九九〇年)があり、日系人の定住化が始まった頃でした。当会の設立には、こうした国内の状況に加え、欧米の先進的な図書館サービスを行っている図書館員たちからの刺激もありました。

図書館の国際的な団体に、国際図書館連盟(IFLA)という組織があり、このなかに、「多文化サービス分科会」があります。その前身のワーキンググループが設けられたのは一九八〇年のことでした。IFLAでは一年に一度世界大会があり、一九八六年には東京大会が開かれました。また一九八七年には、『多文化コミュニティ：図書館サービスのためのガイドライン』が策定され、その後ガイドラインは三版に版を重ねています。このIFLAの働きかけにより、昨秋には、ユネスコで「IFLA多文化図書館宣言」が採択されました。図書館のサービスも他の行政のあり方と

同じように、長い間「マイノリティの言語と文化を支援すること」よりも「移民たちを受け入れ側の社会に同化させること」に主眼が置かれていました。しかし、第二次大戦後の大量の移民・難民の発生や外国人労働者が国境を越えて移動する変化の中で、カナダやオーストラリアの政府レベルでの「多文化主義政策」が大きな転換点となり、これらの国々での図書館員たちの、多様な文化や言語を背景とする人々への母語資料の提供の試みから、図書館の「多文化サービス」はスタートしました。

一方日本でも、一九七〇年代からの図書館サービスの進展の中で、「権利としての図書館利用」の求めに応えた「障害者サービス」が生まれました。この「図書館利用に障害のある人々」の範疇に、「外国人」を含んだ「多文化サービス」が、図書館の基本的なサービスの一つに考えられるようになってきています。

「むすびめの会」という名称は、在住外国人をはじめとする様々な民族的・文化的背景を持つ人々と、それらの人々を対象にした資料や情報、さらに彼等との共生をめざす支援グループと、図書館とを「むすぶ」ことを願ってつけられました。

活動の状況

会の活動としては、学習会・講演会、情報交換、サービスのためのツール作りの三本の柱を据えています。会員数は二〇一〇

むすびめの会

〒261-0012 千葉市美浜区磯辺5-16-5-506 迫田方 FAX 043-277-1658

E-mail : staff@musubime.net URL : http://www.musubime.net/

年三月現在約二六〇人で、北海道から九州そして外国にも会員がおり、活動拠点としては、東京のほか、関西に「むすびめWEST」を置いています。

会員の内訳は、公共・学校・大学・専門図書館員や研究者、出版関係者、国際交流関係団体職員、外国人支援団体関係者、住民・学生など沢山の分野の方々が参加しており、いつでも仲間に加わる方を募っています。

◆ 昨年の例会の活動を少々紹介します。

◆ 学習会：△群馬からの報告▽世界同時不況の中で、ブラジルからの労働者の多い群馬の様子を地元新聞の記者や日系人を囲んで話を伺いました。

◆ 報告会：△横浜市立図書館における児童生徒に対する多文化・多言語サービス推進事業について▽文部科学省の委託事業として、自治体と市民団体が協力して行ったサービスを報告して貰いました。

◆ 講演会：△国会決議はされたけど…アイヌ民族の思い▽関東ウタリ会の北原きよ子さんより、楽器トンコリなどその文化に触れながら、アイヌ民族の思いを語って頂きました。

◆ 特別例会：△愛知特別例会▽豊田市立図書館、愛知県立図書館の見学を行うとともに、岐阜や群馬の日系人の実態を知るための学習会を開きました。

◆ そのほか、大阪で開かれた「IFLA多文化サービス分科会ミッドイヤーミー



↑会報「むすびめ2000」

ティング」で、同分科会の歓迎会や関西の図書館案内、観光ツアーなどをサポートしました。

◆ これら、むすびめの会としての活動や多文化サービス、外国人サービスに関わる情報を掲載する会報『むすびめ2000』を年四回（二〇一〇年三月現在七〇号）発行しています。会報の表紙は、毎号「むすびめ」に関連するイラストで飾られており、今号はどんな絵かと読者に期待されています。

◆ 今後の課題

◆ 日本には、「多文化サービス」を語る時、特有の課題があります。すなわち、過去の

植民地支配の負の遺産としての在日韓国・朝鮮人、中国・台湾人に対する戦後処理の問題です。ニューカマーの外国人が増えるまで、日本人と見分けがつかない彼等は、行政施策から放置されてきました。それに対する彼等の長い「権利獲得運動」の歴史があつたにもかかわらず、公共図書館もそれに応えてきていませんでした。言語的少数者の彼等にどんなサービスをしてきたのかというIFLA東京大会での指摘は、日本の「多文化サービス」の出発点となりました。

◆ 今や三世、四世の世代になっている在日の方々日本語が母語となるに至る言語・文化の喪失経験と運動は、ニューカマーの親と子を取り巻く状況改善の先達となります。またもつと前には、アイヌ語を意識して学ばなければ知ることができなくなったアイヌ民族の歴史と状況が横たわっています。

◆ この不況下で、公立図書館の予算では、まず外国語の資料費が削られているのが現状ですが、多様な文化的背景にある人々の学習権を保障するために、外国人住民も払っている税金を還元すべく、公立図書館は、地域自治体に住む外国人の割合に応じた母語資料を収集し、サービスしようという、私たちの訴えは、確実に浸透してきています。